

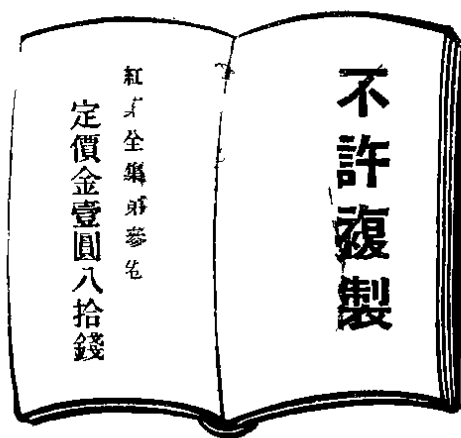


系 崎 紅 葉 葉

紅 葉 金 魚

十 千 葉 金 藏 版

明治三十七年五月五日印刷
明治三十七年五月八日發行



著者 尾崎德太郎

發行者 大橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 野村宗十郎

東京市京橋區築地三丁目十五番地

印刷所 株式會社東京樂地活版製造所

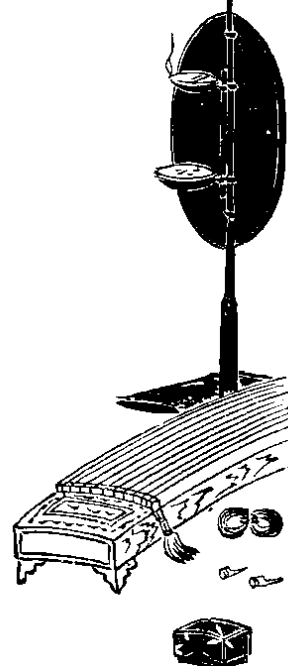
東京市京橋區築地二丁目十七番地

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

十萬堂藏版



紅葉全集 卷之參

目次

三人妻 前編	一
(一) 錢の富士.....	一
(二) 天邊の樂.....	二〇
(三) 沈香亭.....	一五
(四) 火上の氷.....	三
(五) 心配筋.....	三一
(六) 天の邪鬼.....	三八
(七) 濡事師.....	四三
(八) いつも端麗.....	五一

紅葉全集

目次 (三)

(九)	風の柳上	六
(十)	風の柳下	七
(十一)	金と女	七
(十二)	雪盡し	八
(十三)	佩刀の鏽	九
(十四)	煎餅屋の娘	一〇
(十五)	砂糖餅	一三
(十六)	南無三寶	一三
(十七)	尺八の稽古	一四
(十八)	談義所の譽物	一五
(十九)	苔の花	一六
(二十)	御恩がへし	一六
(廿一)	心嬉しき顔	一七

(廿二)	瑠璃の梁	一八七
(廿三)	夜半の嵐	一九四
(廿四)	火澤睽	二〇一
三	人妻 後編	二〇九
(一)	櫻茶屋	二〇九
(二)	口説の種	二三三
(三)	三尺餘の長文	二三〇
(四)	歌舞伎座	二三三
(五)	焼木杭	二四一
(六)	一段半の艶種上	二五九
(七)	一段半の艶種下	二六五
(八)	安請合	二七一
(九)	いとしい貌	二八〇

(十)	姪 娠 劑	二六四
(十一)	芝居茶屋	二六八
(十二)	義理と慾	二九六
(十三)	染井の寮	三〇〇
(十四)	龜井戸の梅	三〇九
(十五)	我目の曇	三二四
(十六)	蓄音器無きそ	三三八
(十七)	興津の文	三三三
(十八)	日光見物	三三〇
(十九)	御 不 在	三三八
(二十)	つれなき人や	三四八
(廿一)	高嶺の松	三五五
(廿二)	髓 様 癌	三六五

(廿三)	可懷の面影	三七
(廿四)	雨後の月	三七
(大)	團圓	三八
俠	黒兒	三八
男	ごゝろ	四九
(一)	人でなしの鮎屋	四九
(二)	吳竹の根岸の里に	四八
(三)	茶箱に詰めて海の中	四八
(四)	幽靈の出る賣家	四六
(五)	氏より育の田舎娘	四七
(六)	裏から綿まで添へて老の手織	四七
(七)	盛りゆく女の十五六	四八
(八)	いつをも知れぬ命	四九

紅葉全集

目次 (六)

(九)	これが思初むるといふ事	四九
(十)	色々御母様の骨折	五〇
(十一)	心高く姿雅びて	五三
(十二)	親の心子不知	五三
(十三)	六萬圓を振分髪	五四
(十四)	六萬圓を戀女房	五一
(十五)	怪、怪、怪！	五六
(自序)		五七
袖時雨		五七
心の闇		六九
紫		六七
(一)	夜半の嚏	六七
(二)	晝間の嚏	七一

(三)	話合手	七五
(四)	記憶力	八二
(五)	讀書禪	八〇
(六)	正信偈	八三
(七)	隣は麵包	八九
(八)	貧の一燈	八三
(九)	漂母の餐	八五
(十)	若松様	八六
(十一)	生死の界	八七
(十二)	唐茄子	八七
(十三)	別の盆	八一
(十四)	おもひくの驢	八九
(十五)	今日は出遊	九四

紅世全集

目次 (八)

(十六) 御機嫌よう……………九二

目次終



紅葉全集

三人妻前編 (一)

三人妻

前編

(一) 錢の富士

あるやうで無いもの金銭とて、
天下の人寐言にまで言うて欲し
がらざるはなし、信に此金銭の
獲難きことの不思議は、鐵を吸
ふには奇妙、磁石といふ神通力
あるに、是は又何したもの、
金時計買ふ人の後に過難に立て
る納豆賣の獨語尤也。此物羨み
の男とて、母の胎内を苞入にて
滾出し、臍の緒に絲を牽きしに
もあらざるべく、二十四五の頃

には随分百兩包の顔も見て、其重寶なる味をも知りけらし。羨まるゝ男
とて身内に金脈のあるにはあらず、由來を聞けば孰か額の汗の滴れて、
粒々金色の御光を放つにあらざるべき。

失ひ易しと思ふ方の金銭は、皆獲難しと念ふ人の手に落ちて、あるやう
で無いものとは謂ひながら、在る所には又腐るほど在るもの哉、今此日
本に葛城餘五郎といふ名を知らざるものなし。これの持てる資産を、盡
く一錢銅貨に換へて聯ぬる時は、恐るべし日本國を五卷半捲きて、其餘
れる分を積重ねて見れば、富士山の高さの六層倍、と要らざる事を統計
家の傳へ侍る。

これが一人の寶なり。惟へば裏借屋の奥に家内五人暮し、夕方になれば
文久四つ残る日を、一年中の安樂日として、朝は芋の尾を粥に啜り、午
餉は大方拔にして、晩が南京米の雑炊といへる輩の、天から授けられた
る配當を、優勝劣敗の理にやられて、かゝる人の弗箱に吸取られ、旨く

した男は神か國王かの如く振舞ふに、下根弱肉の大勢動物館の山犬ほども食うた例無くて世を送るなりけり。

萬國何方にも無慾の人といふは無ければ、金錢の置場に當惑して、竹箒に懸け、箕に入れて、之を大道に捨つるものゝあるべきやうはなきに、何處いかなる所に餘五郎はさほどの蔓を見出して儲けたるぞ、手を三つ鳴せば忽然として千圓札の降來る奇術を得たるものならむ、と餘りの訝しさに素生を糺せば、加州金澤在談義所といふ村に、鳴るは瀧の水、日は照れども絶えず陰のごとく微き土百姓の次男に生れけるが、天性の利發土なぶりを憂き事に思ひ、十七の年國元を逐電して江戸にさまよひ、一二年は便る方なさに乞食の眞似もして、それから出世の小口、湯屋の木拾に成りて、人の中なる溝鼠、之もおもしろからず。頓て蕎麥屋の擔夫に入込みて、暫く働きける中に、始めて眼孔の木眼ならぬ人に見出されぬ。それは大原富五郎とて流聲の鑛山師なり。

餘五郎其時二十四なりしが、機敏鬼神の再生、と大富も舌を巻きて手足の如く頼めば、餘五郎も此奴骨ありと服して勤めける程に、立身衆に越えて、一年の間に世智賢きものばかり聚めたる二三十人の上席にすわり、大原組の一番々頭餘五郎の下に様の字を附けられ、會ふもの、頭は先方から下りぬ。其中には四五年前には、附くなくと袂を振りし旦那様もあるべし。

餘五郎二十八の年、大富一生に唯一度の見込違ひより、見事に身代を叩き、借財忽ち山のごとく、之に心挫けて勇しき了簡の失せけるを、芥子の膽と餘五郎心に可頼しからず、言を盡して勵せども肯かず。此蹉跌病の源となりて、間も無く大富は亡くなりけり。

其後は餘五郎鑛山に限らず、どかりと儲かるほどの事には、先鞭に首を入れて逸す事なかりしに、折々の些細の損は、一度の大儲に埋合せて、次第に仕出しける上、明治維新の擾亂に紛れ、爲たい三昧の旨い事して、

一網に五六萬の利益は、其折わづか十五兩で買置きたる地面の、泰平になりてから暴に二千圓になりけるなど、さる類の多かりき。

明治の世となりて萬事に歐羅巴を寫す氣運に伴れ、舶來の儲口潮のごとく、滔々と寄せ來るを此時と、世間は成らぬ事に念へる三千里の荒海を押渡り、日本にては一錢に十個するほどのものを、珍しがる毛唐人に五弗十弗に賣りて、又其國の下らぬ物を買集め、持還りて都人の心を動かし、之にても亦算盤の外の利益、唯奪つたも同じ様なる手易さに、金錢が金錢を招ぶとは此事なり。

それより類異れる商社を四つまで立て、股肱の才物に預け、其外拔目なく八方に手を擴げて、四天王に麾を取らせ、自家は風流無慾の顔して、都外の閑靜なる處に、華族かと人にいはるゝ居宅を構へ、其四邊の地面は、目の及ぶ限り我垣の内にして、庭に追剝の出でしとも噂されけるなり。

利の事は一切手代委せにして、我は有金を我が一代に費ふべき工夫に屈托してゐる事と誰も想ひけるに、此身代になりても更に満足する事なく、箸の上下にも錢儲に肝膽を碎き、之はと思ふ計畫浮べば、酒盃を投捨て、馬車を急がせ、腹心の手代に計を含め、唯二三日の内に、人間一匹二代は懷手しても樂に暮しのなるほどの商ひすれば、如何様尤と、世間は餘五郎が大抵の贅澤に驚かず、東京間近の名所々々には葛城が別宅の瓦屋根を見ざる事なし。

ある夜の酔紛れに、泉水の月を観めて、此景色の好き、我は未だ須磨の秋といふものを知らず、人の話に詐なくば、いつぞは見たいものといへば、御相伴に踞りたる男、此御庭先より鐵道を布き、風呂場、料理場、お寢間、お座敷附の汽車を造らせ、お浴衣のまゝづいと御出は如何。餘人は知らず御前の力なれば、譯も無い事といひしは、追従なれども其ほどの金力は確にある身分にて、其もをかしからぬにあらねど、今という